

③ 出土遺物

碗・皿・小坏・鉢・猪口・蓋・カラカラ・仏飯器などの多種多様な磁器が出土しています。その多くには青色や緑色で絵が描かれています(染付)。「松山」・「松」と描かれた磁器もあり、中には「明治十七年」や「明治三十五年」と作られた時期を記したものもあります。

窯道具にもいろいろな種類があり、大きさや形は様々です。最も多いのは、センベイです。三角マークの中に「山」や「油(柚)」と刻印した窯道具も見つかり、この窯の名を示している可能性があります。



平佐焼の概要

平佐焼は、薩摩川内市天辰町皿山に所在する窯跡群で江戸時代から昭和初期にかけて生産された磁器です。当時薩摩藩内における磁器生産の中心地であり、県内最大の磁器窯跡群でした。

その歴史は、平佐郷白和町の今井儀右衛門が有田から陶工を招いて、出水郡脇本町(阿久根市)で脇本窯を開窯したことに始まります(1772~1781)。しかし、数年で廃窯します。その際に北郷家(平佐の領主)家臣伊地知団右衛門が話を聞き、平佐焼窯場を開窯したとされています。

明治4年(1871)の廃藩置県により北郷家の援助が途絶えた後は、個人経営に移行していきました。松山窯跡・永井窯跡・勝目窯跡・向井窯跡・現窯跡が確認されています。昭和16(1941)年の火入れを最後に廃窯したとされています。



現窯跡(薩摩川内市文化財指定)



平佐焼製品(個人蔵)



平佐焼窯跡分布図

※鹿児島大学の調査結果をもとに作成

現地説明会資料

ひらさやきかまあとぐん

平佐焼窯跡群

令和3年11月3日(水)

(公財)鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



1 平佐焼窯跡群について

平佐焼窯跡群は、薩摩川内市天辰町門口の川内川左岸、河口から約14km上流の上床山(寺山)すそ部に位置しています。今回調査している窯跡は、標高10~15m程度で、窯跡群の中で最も川の近くにあります。天辰第二地区引堤事業に伴い、10月から発掘調査を行っています。

明治7(1874)年頃、田中徳兵衛によって開窯され、明治11年頃には柚木崎六兵衛がこの窯を引き継いだと考えられている窯跡です。地権者は六兵衛の実子である松山幸之助です。

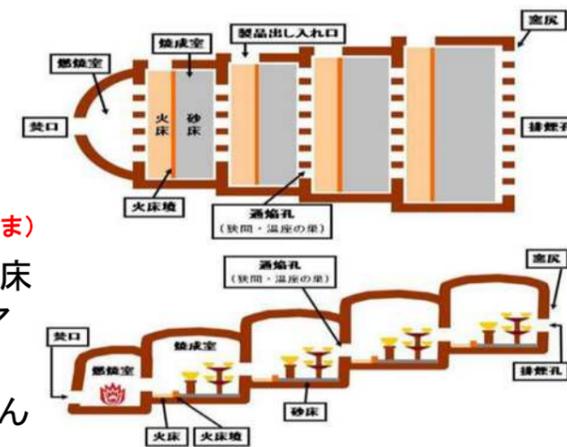
大正3(1914)年から始まった川宮鉄道(のちの国鉄宮之城線)の建設によって窯は寸断されたといわれています。



2 主な調査成果

① 扇形連房式登窯(おうぎがたれんぼうしきのぼりがま)

砂床(すなどこ:製品を並べて焼成する場所)と火床(ひどこ:薪を燃やす部分)の境に粘土で作られたアゼである火床境、温座の巣(おんざのす:下の部屋から上の部屋へ炎を伝える施設)の通焰坑(つうえんこう:炎を通す穴)などが確認できたことから窯の様子が分かってきました。



扇形連房式登窯の構造模式図
(鹿児島大学渡辺芳郎教授「平佐焼の考古学」より)

② 物原(ものはら:焼き損じた製品や製作に用いた道具などの廃棄場所)

物原には歪んだり重なったりした碗や焼いたときの台がくっついた碗など多くの焼き損なった製品があります。また、窯詰めの際、焼き物を置いたり積み重ねたりするときに用いるハマ(様々な形の焼台)・トチン(円筒状の焼台)・チャツ(丸い凹みのある焼台)・センベイ(薄い円板状の焼台)などと呼ばれる窯道具も多く出土しています。



ハマ



トチン



チャツ



センベイ

